

38 年ぶりに見たカンボジアの首都プノンペン

大野正夫

1969 年暮から 1970 年 1 月に、カンボジア・トンレサップ湖を調査ことは、このHPで報告した。ウクライナのニュースを聞き続けて戦争という悲惨が、いつでも起り、また復興をする、事例として、その後のカンボジアの情勢を記述したい。

ゼレンスキー大統領が、広島平和資料館をみた後のインタビューで、「今のバムフトウの戦場は、悲惨な被爆直後の広島と同じである。今の緑あふれる平和な広島ようにバムフトウをしたい」語ったが、平和は重要である。

平和なシアヌーク王朝カンボジアが、1970 年のクーデターで幕がおり、5 年間の内戦が続き、のちに原始社会主義のポルポト時代となり、非道な支配が続き、人口の 4 分の 1 のひとが亡くなった。1979 年のベトナム軍の侵攻により、カンボジア国軍政が引かれて、治安は安定した。

1993 年 5 月には国際連合の監視下で民主選挙が実施された。6 月 2 日、国連安全保障理事会は、選挙が自由・公正に行われたと宣言し、選挙結果を尊重するよう全会派に呼びかける決議をした。さらに 6 月 10 日には、選挙結果の確定を承認し、制憲議会を全面支持する旨を決議した。9 月に制憲議会が新憲法を發布し立憲君主制を採択、ノロドム・シハヌークが国王に再即位した。憲法は「**複数政党制に立脚した自由な民主主義**」と公報されて、国民議会に移行した。1999 年 4 月に 10 番目の東南アジア諸国連合 (ASEAN) 加盟国となった。ベトナム支援ではあるが選挙による民主政権となり、急速な復興となった。

復興の軌道に乗った 2017 年 8 月に、ラオスへの旅の途中で、プノンペンに宿泊し、市街を観光バスに乗り、みて歩いた。空港に下降する時に、窓からみた光景は、記憶のプノンペン市街ではなかった。



以前は、緑に覆われた町であったが、ほとんど、緑のない街に変わっていて驚いた。長く続いた内戦で、街路樹は、燃料に使われてしまい、促成の住宅街となっていた。

大きな建物や緑地がないことで、復興の過程にあることを知った、しかし、道路の配置は整然としており、将来は、街路樹を大きくそだち、美しいに町が変わってゆくと期待した。

観光バスは、日本語ガイドが付いた。彼の父親は、学校の先生であったが、そのことを隠して、農民の子供として、ポルポト時代を過ごしたそうである。ポルポト時代が終わっ

て、15 歳から小学校、高校で学ぶ機会があり、高校を卒業して、日本語学校で日本語を学んだ。理由は観光ガイドが高収入だと聞いたので、日本語を学んだそうです。流暢な日本語でガイドしてくださったが、「ポルポト時代のことは話したくない」と言われた。

トゥールスレン虐殺博物館

トゥールスレン虐殺博物館はプノンペン市内にある。ポルポト政権時代に、ここで尋問、拷問と死刑が行われていた。



街の中心地で、コンクリート3階の元中高一貫学校の校舎であった(ネットより)。ここには日本語のガイドが団体の説明をしたが、館内に撮影は禁止された。ガイドの指示で館内を歩いた。ここでは多くの政治犯が収容されて殺された。殺害された数は不明だが、脱出できた者は確認されていない。埋める場所がなくなり、強制収容所は、別のところに移された。掘り起こされた頭蓋骨が陳列されていた。

写真撮影は禁止されているが、入るとすぐに頭蓋骨が、山形に積まれたところがあった。芸術品のようになってしまうが、これがひとり、ひとりと思うと、ゾクゾクとした。女性の観光客の幾人かは、途中で外へ出てしまった。出口はいくつもあった。順路に従って最後まで、見るにはかなりの勇気がある。拷問の場や処刑の場も、そのまま残されており、ロープも、そのまま吊るされていた。

独房が狭いのは驚いた。日本の狭いトイレの広さで天井が空いている。教室をレンガで仕切ったのである。監視のためだそうだ。トイレはなく、小さなバケツであった。シャワーはなく、天井から、ホースで水をかけていた。拷問や首つりの場所をみたが、記述はやめておこう。ただ、処刑は子供達が行ったと説明された。アフリカの少年兵、ウクライナで子供達が連れて行かれるのと、同じ理由に思えてくる。

プノンペン中央市場

プノンペンの中心街で、1969年に訪れた同じ建物が、リニューアルされて、下に示す中央市場になっていた。角が丸くなっているのが特長である。フランス様式だろうか。市場内は、明るく清楚で、通路は狭いが、売られている商品は豊富であった。野菜や水産物は、以前は外で売られていたが、今は、この建物の中で売られていた。魚が氷のケースのなかに入っていたが、周囲に、臭いは漂ってはいず、日本のスーパー店と同じ雰囲気であった。市街の商店は、活気が感じられて、順調に復興していることを実感した。左の街路樹が低い。樹木が大きくなると、この光景も変わってくるだろう。



プノンペンの中心街の中央市場の建物

4 車線の中央通り



最も近代化が進んだ四つ角

プノンペンの復興を感じたのは、この4車線道路である。1970年の時は、車道は広く大木の街路樹で、森の中に、町があるように思えた。しかも信号がないほど自動車が少なかった。復興計画で、このようなヤシが植えられた自動車道ができているのは驚きであった。このワシントンヤシは、30年の歳月を物語っている。信号機が、特に印象的であった。

写真の奥には、少ないが高層ビジネスビルも建ち始めていた。

カンボジアの課題

カンボジアの復興は、ベトナムからの支援があると聞いた。空港で初老の実業家と思われる方と話す機会があった。彼はクメール人であった。そのためか、ベトナムの支配下にある政治体制を非難していた。ベトナム軍が、ポルポトを駆逐したが、そのままベトナムが居座っていることを嘆いた。現在、カンボジアは民主主義国家となっており、ベトナム社会主義国家とは違う。しかしベトナム系クメール人が、ビジネスを握っており、地方のクメール人農民は、相変わらず貧しいと言われた。バスの日本語ガイドも、同じようなことを言っていた。今のカンボジアは、安定し豊かになり、自由に発言できるようになったことは嬉しいが、ベトナムの影響が強く属国となってしまうと言った。

アンコールワットに象徴されるクメール国の歴史を知ると、独立国の尊厳を欠いている現状には満足していなかった。ウクライナ人がロシア侵攻を好まないことと似ている。ベトナム国が海岸線に沿ってあるのは、かつてのクメール国であったところである。

簡単な表現ではあるが、クメール人はひとが良く、ベトナム人は賢いということであろう。現在ベトナム系カンボジア人と表現することが多く、かなり血統は混ざり合っているのだらう。二つの気質が混ざれば、良い国造りができる。